ドイツ語の与格と空間補足語について[1]

片 岡 宜 行

1. はじめに

ドイツ語の与格は、通例文法書において目的語の与格と自由な与格に区分され、自由な与格はさらに、「所有の与格」や「利益／不利益の与格」など複数のグループに分類されている。このような分類の妥当性に対しては、しばしば異論が唱えられている。[2] しかし、従来の分類に代わるような与格の持つ機能の明確な体系化はまだ為されていない。与格について説明するには、依然として「所有の与格」や「利益／不利益の与格」といった名称を使わざるをえないのが現状である。本論文では、まず、与格が従来の区分を超えた意味的機能を持つことを明らかにする(第2章)。そのうえで、与格の機能の一端を明らかにする試みの一つとして、与格と空間補足語の関係について論じる(第3章)。

2. 与格の意味的機能

本章では、まず一般的な与格の分類法を確認したうえで、その問題点を指摘し、従来の区分を超えるような与格の意味的機能を明らかにする。

2. 1. 一般的な与格の分類法

ここでは、標準的な分類法をとっている Hentschel / Weydt(1990:158ff.)を例にとり、現在与格がどのように分類されているかを概観する。

与格はまず、動詞や形容詞の目的語である与格と、文中の要素に直接従属しない自

---

[1] 本論文では Duden(1995:629, 652ff.)にならい、空間補足語(Raumergänzung)という語を用いる。空間補足語は、場所(a)・方向(b)・起点(c)を表す補足語の全てを含むものとする。

(a) Karl arbeitet *in München*.
(b) Elisabeth geht *ins Theater*.
(c) Inge kommt *aus dem Schwimmbad*.

なお、空間を表す前置詞句が必ずしも必須の文成分でない場合も、本論文の考察の対象とする。

[2] 与格の分類をめぐる諸問題については拙稿(1998)を参照。

由な与格(freier Dativ)に大きく分けられている。そして、自由な与格は3つのグループに区分されている。

A. 目的語の与格

(1) Sie gab das Buch *ihrer Kollegin*.(動詞の目的語)

(2) Sie ist *ihrer Schwester* ähnlich.(形容詞の目的語)

B. 自由な与格

・利益／不利益の与格 (Dativus commodi / incommodi)

ある行為が行われた結果利害をこうむる人物を動詞の格支配とは無関係に表す。

(3) Er hat *ihr* Spaghetti gekocht.(利益の与格)

(4) Er hat *ihr* das Auto zu Schrott gefahren.(不利益の与格)

・所有の与格 (Dativus possessivus, Pertinenzdativ)

所有代名詞あるいは所有の属格の代わりをする。

(5) Sie klopfte *mir* freundschaftlich auf die Schulter.

(6) Alle schüttelten *der Preisträgerin* die Hand.

・関心の与格 (Dativus ethicus)

判断する人物を表す。

(7) Komm *mir* ja nicht zu spät!

これらのほか、以下の(8)に見られるような与格を、判断の与格 (Dativus iudicantis) ないし基準の与格 (Dativ des Maßstabs) と呼んで他から区別することもある。[3]

(8) Er arbeitet *mir* zu langsam. (Helbig / Buscha 1996:290)

このような分類法は、すでに Paul(1919:378ff.)が行っているものとほとんど違わず、多少の差異はあっても今日のたいていの文法書で採用されているものである。一般の文法書においては、通例このような分類の基準が示されず、また、各グループが互いに独立したものなのかどうかという点にも言及されない。しかし、統語的・意味的な分類基準を厳密に立てたうえで与格の各グループを明確に定義しようとした Helbig(1981)も、結局伝統的な分類法をほぼそのまま踏襲している。[4]

---

[3] Hentschel / Weydt は、関心の与格と判断の与格を区別していない。

[4] 与格の各グループのうち、関心の与格と判断の与格がそれぞれ固有のグループであることについては研究者のあいだでほぼ見解の一致を見ている。以下、本論文では、目的語の与格・所有の与格・利益／不利益の与格を考察の対象とする。

2. 2. 従来の分類の問題点と与格の意味的機能

前節で見たような与格の各グループの名称は、それぞれの与格の特性を表したものであるとはいえるが、各グループを互いに異質なものとみなし厳密に区分しようすると問題が生じる。

第一の問題点は、「利益・不利益を受ける人物を表す」というような曖昧な意味的性質を分類の基準としていることである。以下の例文が示すように、目的語の与格や所有の与格と呼ばれるものも、出来事の「受益者」や「被害者」と解釈できることがある。

(9) Der Junge schenkt *seiner Mutter* Blumen.(受益者を表す目的語の与格)

(10) Er schlägt *ihm* ins Gesicht.(被害者を表す所有の与格)

また、利益や不利益を受ける人物を表すといった意味的性質は必ずしも動詞の意味によって決定されるのではなく、発話時の状況や文脈の影響を受ける。そのような曖昧な意味的性質を、他から独立した「利益／不利益の与格」というグループを認定する基準として用いることは不適切である。

第二の問題点は、互いに異質なものとして各グループを認定することにより、グループ間の境界を越えるような与格の機能が見失われてしまうことである。

一般的な分類法に従えば、所有の与格は自由な与格に属し、文中の他の語との間に「所有の関係(Pertinenzrelation)」をもつ。

(11) (...), und es endete meistens damit, daß eins der übermüdeten Kinder *Marie, mir, Karl oder Sabine* das Weinglas <u>aus der Hand</u> riß und den Wein über die Klassenarbeitshefte ausgoß, (...) (LBC, 254)

(12) Ich schlug *ihr* den Suppenlöffel <u>aus der Hand</u>, (...) (LBC, 279)

reißen や schlagen は与格目的語を取らないので、これらの文中の与格は自由な与格とみなされる。また、これらの与格は、下線を付した前置詞句の中に現れる「手」の所有者を示しているので、所有の与格ということになる。しかし、目的語の与格もまた、身体部位の所有者を示すことがある。

(13) Man gab *der Dame* den Spiegel <u>in die Hand</u>. (Zifonun 1997:1337)

(14) (...) — aber ich schaufelte weiter, bis Marie *mir* die Schüppe <u>aus der Hand</u> nahm. (LBC, 286)

geben や nehmen とともに現れた与格は通例目的語とみなされる。しかし、(13)や(14)の与格は(11)や(12)と同一の構文中に生じ、同じように前置詞句の中に現れた「手」の所有者を示している。

以上見てきたように、「目的語の与格」や「所有の与格」は受益者や被害者を表すこと

があり、「目的語の与格」は身体部位の所有者を表すことがある。このように、与格は従来なされてきた区分を超えた意味的機能を持つ。[5] したがって、従来の区分は撤廃すべきである。また、「所有の関係を担う」といった機能は、特定のグループの属性ではなく、ある条件下で与格に付加されるものとみなすべきである。

以下、本論文では、そうした与格の機能を探る試みの一つとして、空間補足語とともに現れた与格について論じる。

3. 与格と空間補足語

本章では、まず「所有の関係」をもつ与格と空間補足語の密接な関係を明らかにしたうえで、両者が文全体に対してそれぞれどのような意味的機能を持っているのかを考察する。また、与格と空間補足語の間に明確な所有の関係が見られない場合についても検討する。

3. 1. 所有の関係をもつ与格と空間補足語

(15) Marie fiel *mir* weinend <u>um den Hals</u>, und ich weinte auch. (LBC, 196)

この例文に見られるようないわゆる「所有の与格」は、身体部位を表す名詞と所有の関係を持ち、名詞の付加語に近いものとみなされる。[6] しかし、身体部位を表す名詞が必ず与格と所有の関係にあるとは限らない。

(16) (...), lange Haare fielen *ihm* <u>an den oberen Rand</u> der eleganten Dunkelbrille, (...) (LJA, 15)

この文で、与格代名詞 „ihm“ を „lange Haare“ の付加語とみなし、「彼の髪が」と解釈することは不可能であり、„ihm“ と所有の関係を結んでいるのは „den oberen Rand“ である。確かに所有の関係は与格と身体部位を表す名詞の間に顕著に見られるが、所有の関係が構文中の特定の要素間に生じることにも着目すべきである。

Schmid (1988:131f.) は、所有の関係の現れる構文を4つに分類する。与格と所有の

---

[5] 与格を複数のグループに明確に区分できないことは、Zifonun(1997:1337ff.)によっても指摘されている。

[6] 例えば Helbig (1981:331)がこの見解をとる。なお、Helbig は所有の対象が着用中の衣服である場合を所有の関係に含めていないが、本論文では所有の対象が身体部位である場合(a)と衣服(および衣服に類するもの)である場合(b)を区別しない。

(a) Er trat ihr auf *den Fuß*.

(b) Er trat ihr auf *den Schuh*.

関係を結ぶ要素に下線を付すと、以下のようになる。[7]

1　S V *PD* PP　　Max schlägt *ihr* auf die Schulter.

2　S V *PD* AP PP　　Max legt *ihr* den Arm auf die Schulter.

3　S V *PD* AP　　Max wäscht *sich* die Haare.

4　S V *PD*　　*Max* zitterten die Hände.

所有の関係は特定の要素間に現れる。前置詞句が現れる1および2の構文では、所有の関係は与格と前置詞句の間に生じる。以下、1・2の構文についてコーパスから取った例文を補い、所有の関係の現れる位置を確認する。

1の構文の例:

(17) *Ihr* liefen die Tränen übers Gesicht, (...) (LBC, 55)

(15) Marie fiel *mir* weinend um den Hals, und ich weinte auch. (LBC, 196)

2の構文の例:

(18) Ich konnte diese Augenblicke nicht beschreiben und sie *mir* wie einen Orden um den Hals hängen. (LBC, 272)

(19) (...), der *mir* wahrscheinlich ein Fünfmarkstück vor die Nase halten und mich zwingen würde, danach zu springen. (LBC, 260)

いずれの例文においても、所有の関係は与格と空間補足語の間に見られる。

次に、所有の関係によって結ばれた与格と空間補足語が、文全体に対してどのような意味的機能を担っているのかという観点から、両者の関係について考察する。

3. 2. 与格と空間補足語の意味的機能

与格と空間補足語について考察するにあたり、まずはじめに、jm. schreiben と an jn. schreiben における与格と an-前置詞句のように、互いに交換可能な与格と前置詞句について述べる。

このような与格と前置詞句の意味内容の差異については、Wilmanns(1909:660)が明確に述べている。Wilmannsによれば、前置詞句が場所を規定するにすぎないのに対し、

---

[7] 用語を以下のように略した。S…Subjekt　V…Verbum finitum　PD…Pertinenzdativ　PP…Präpositionalphrase　AP…Akkusativphrase
例文も同書から取った(ただし斜字体と下線は筆者による)。
なお、各構文において所有の関係が現れる位置については、Duden(1995:672ff.)も同様の見解を示している。

与格はより密接な、対人的な関係を示す。[8]

(20a) Er brachte *mir* einen Strauß.

(20b) Er brachte einen Strauß *zu mir*.

Wilmanns によれば、(20a)の „mir" が受取人を表すのに対し、(20b)の „zu mir" は空間的な目標を示す。

このような与格と前置詞句は、同一の文中に共起することもある。

(21) Ich werde *ihm* demnächst an die Adresse der Pädagogischen Hochschule schreiben und (...) (LBC, 32)

この文の与格と前置詞句は、それぞれ、手紙を書く相手である人物と具体的な宛先を示している。所有の関係によって結ばれた与格と空間補足語も、同じように意味的な機能を分担しているのではないだろうか。この問いに答えるために、コーパスから取った例文を挙げ、検討する。例文は、まず空間補足語が方向・起点・場所のいずれを示すかによって分け、また、それぞれを対格補足語を持つか持たないかによって分けた。対格補足語を持たないものは Schmid の1番目の構文に、対格補足語を持つものは 2 番目の構文に相当する。

A. 空間補足語が方向を示すもの

・対格補足語がないもの

(22) Er blickte *mir* in die Augen, (...) (LBC, 71)

(23) Er strahlte, klopfte *mir* auf die Schulter, (...) (LBC, 195)

(24) Ich rannte in Henriettes Zimmer hinauf, riß das Fenster auf und warf alles, so wie es *mir* zwischen die Hände kam, in den Garten hinaus: (...) (LBC, 279)

(25) Sofort schlug *mir* sein Bieratem ins Gesicht. (LBC, 135)

(22)や(23)の動詞の表す行為は、身体の特定の部位を目標とした行為であると同時に、相手の人物全体を対象とした行為でもある。与格が対象である人物を、空間補足語が具体的な方向を示しており、Wilmanns の説明がそのまま当てはまるといえる。(24)や(25)でも、具体的な方向が空間補足語によって示されているのに対し、出来事の中心に置かれた人物が与格で示されている。

---

[8] この Wilmannsの見解は、今日でも Wegener(1985:225)などによってしばしば引用されている。特に Erben(1980:147)は、この見解が「一般に有効である」と認めている。

・対格補足語があるもの

(26) (...), daß du *mir* die Hand auf die Schulter gelegt hast, (...) (LBC, 208)

(27) (...), ich zögerte, fing dann langsam an, die Münzen einzusammeln, ich war versucht, sie *mir* in die offene Hand zu streichen, (...) (LBC, 79)

(28) Ich stopfte *mir* alle erreichbaren Kissen in den Rücken, legte mein wundes Bein hoch, (...) (LBC, 44)

ここでも、与格は行為の対象である人物を、空間補足語は行為の向かう具体的な方向を示している。

B. 空間補足語が起点を示すもの

・対格補足語がないもの

(29) Einmal fiel *ihr* mitten in einem Tennismatch der Schläger aus der Hand, (...) (LBC, 37)

(30) (...), und sie rauchte die erste Zigarette ihres Lebens, ungeschickt; wir mußten lachen, sie blies den Rauch so komisch aus ihrem gespitzten Mund, daß es fast kokett aussah, und als er *ihr* zufällig einmal aus der Nase herauskam, lachte ich: (...) (LBC, 54)

これらの例文の与格は、単なる「身体部位の所有者」ではなく、「ラケットを落とす」とか「煙を吐き出す」といった出来事・行為の当事者を示している。一方の空間補足語は具体的な起点を示しており、機能の分担が成立している。

・対格補足語があるもの

(31) Ich nahm *Anna* die Kanne aus der Hand, goß mir Kaffee ein, (...) (LBC, 75)

(32) Ich hatte (...) *ihm* die blonden Haare aus der schmutzigen Stirn gestrichen; (...) (LBC, 76)

ここでは行為の対象である人物が与格で、動作の具体的な起点が空間補足語で示されている。

C. 空間補足語が場所を示すもの

・対格補足語がないもの

(33) *Mir* drehte sich vor Müdigkeit und Verwirrung alles vor den Augen: (...) (LBC, 96)[9]

(34) *Mir* ging viel durch den Kopf, während ich Marie beim Ankleiden zusah. (LBC, 62)

(35) (...), obwohl *mir* der Schweiß von Stirn und Wangen lief. (LBC, 97)

(36) (...), und singe mit mäßig lauter Stimme ausschließlich Liturgisches: Choräle, Hymnen, Sequenzen, die *mir* noch aus der Schulzeit in Erinnerung sind. (LBC, 12)

(37) Obwohl die Bohnen, die ich gegessen hatte, *mir* noch schwer im Magen lagen und meine Melancholie steigerten, (...) (LBC, 241)

(33)の与格は、単に「身体部位の所有者」を示すのではなく、„Mir schwindelt." などの与格と同様に感覚の主体を表すという機能を果たしているといえる。そのほかの例文の与格も出来事や状態の当事者を表しており、場所の表示を受け持つ空間補足語との機能の分担が成立している。

・対格補足語があるもの

(38) (...), in einer Spalte sah er Achims Kinn geneigt über eine unsichere Hand, die *ihm* am Rockaufschlag etwas befestigte, (...) (LJA, 16)

ここでも出来事の中心にある人物が与格で、具体的な場所が空間補足語で表されている。

このように、いずれの場合においても与格が全体としての人物を示すのに対し、空間補足語は局所的な方向・起点・場所を示す。また、与格が行為の対象や出来事・状態の当事者を示すのに対し、空間補足語は具体的な空間を示す。与格と空間補足語は単に所有の関係によって結ばれているだけでなく、文全体に対して互いに補いあうような意味的機能を持ち、両者が一体となって方向・起点・場所を表す。

与格の意味的機能をこのように捉えることで、次の例文(39c)が容認されないことも説明

---

[9] 対格の再帰代名詞を文中に含むが、対格補足語がない場合に含めた。

できる。[10] 与格を用いた文では与格と空間補足語が一体となって出来事の向かう方向を示すので、「私」と「帽子」は別の場所には存在し得ない。

(39a) Der Regen tropft *mir* auf den Hut.

(39b) Der Regen tropft auf *meinen* Hut, der dort hängt.

(39c) * Der Regen tropft *mir* auf den Hut, der dort hängt.

3. 3. 所有の関係がない場合

これまで所有の関係で結ばれた与格と空間補足語についてみてきたが、ここでは、明確な所有の関係の見られない与格と空間補足語の間にも同様の関係があるかどうかを検討する。

(40) Die Kinder nahmen Bonbons, Griffel, Radiergummi aus den Regalen und legten *dem alten Derkum* das Geld auf die Theke. (LBC, 78)

与格と空間補足語の間に所有の関係がある場合には、空間補足語の中に身体部位ないしはそれに準ずるもの(着用中の衣服など)が含まれ、それが与格の示す人物と不可分の関係にある。例文(40)では、与格名詞と空間補足語の中の「カウンター」の間には、このような密接な関係はない。しかし、「お金」が「カウンター」に向けて移動させられたということは、同時に「お金」が与格の表す人物(受取人)に渡すために移動させられたということを意味しており、与格と空間補足語は一体となって行為の向かう方向を示しているといえる。また、与格が行為の向けられた対象である人物を示すのに対して空間補足語は具体的な方向を示しており、与格と空間補足語の意味的機能の分担が成立している。

次の例文でも、与格と空間補足語の一体性と機能の分担が見られる。

(41) (...), daß *ihm* eine Taube ihren Dreck auf die Trommel geworfen hätte, (...) (LGB, 83)

しかし、このような与格と空間補足語の関係が認められない場合もある。

(42) Er würde sagen, er wäre ausgerutscht, die Mappe wäre *ihm* in eine Pfütze gefallen, (...) (LBC, 145)

この文の空間補足語は方向を示すが、その方向は与格の人物の方を向いたものではなく、むしろ逆の方を向いており、両者が一体となって出来事の向きを表しているとはいえない。

---

[10] 例文は Helbig(1981:326)から取ったが一部変更を加えた。容認度についてはドイツ語を母国語とする人に判定してもらった。

次の文では、与格は行為の向けられた対象を示しているが、空間補足語は与格と同一の方向を示しておらず、„schieben“ という行為の行われる場所全体を示している。

(43) — „Hier“, sagte er und schob *mir* einen Zettel <u>über den Tisch</u>. (LBC, 79)

文の解釈のされ方によって、与格と空間補足語の関係に差が生じる場合もある。

(44) Ich werde *dir* den Brief <u>in den Briefkasten</u> stecken. (Zifonun 1997:1339)

この文は2通りに解釈することが可能である。「私」が「君」の所有する郵便箱に手紙を入れると解釈する場合には、与格と空間補足語が同一の方向を示しており、両者の機能分担が成立している。しかし、「私」が「君」のために(または「君」に代わって)誰か他の人の郵便受け(ないしは郵便ポスト)に手紙を入れるのであれば、与格と空間補足語が同一の方向を示すとはいえない。

このように、所有の関係がない場合には、与格と空間補足語の一体性・機能分担が常に認められるとは限らない。また、どのような場合に与格と空間補足語の間にこのような関係が成立するのかということも、まだ明らかにできていない。

4. おわりに

ドイツ語の与格に付加されうる機能の一つとして、「空間補足語と一体となって方向・起点・場所を表す」という機能を認めることができる。その際、空間補足語が具体的な方向・起点・場所を示すのに対し、与格は行為の対象である人物や出来事・状態の当事者を示す。このような与格と空間補足語の一体性・意味的機能の分担は、所有の関係で結ばれたものについては例外なくみることができた。一方、所有の関係がない場合にも、部分的にではあるが同様の関係が認められた。

本論文では空間補足語を含んだ構文に現れる与格に限って考察してきたが、このような機能が与格の機能全体の中でどのように位置付けられるのかという問いにはまだ答えることができない。与格の持つ機能の総体をより詳細に明らかにしてゆくことが今後の課題である。

文献一覧

Duden (1995): Bd. 4. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, hrsg. v. G. Drosdowski. 5. A. Mannheim.

Erben, Johannes (1980): Deutsche Grammatik. Ein Abriß. 12. A. München.

Helbig, Gerhard (1981): Die freien Dative im Deutschen. In: Deutsch als Fremdsprache 18. S. 321-332.

Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim (1996): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 17. A. Leipzig.

Hentschel, Elke / Weydt, Harald (1990): Handbuch der deutschen Grammatik. Berlin.

Paul, Hermann (1919): Deutsche Grammatik.Ⅲ. Halle.

Schmid, Josef (1988): Untersuchungen zum sogenannten freien Dativ in der Gegenwartssprache und auf Vorstufen des heutigen Deutsch. Regensburger Beiträge 35. Frankfurt am Main.

Wegener, Heide (1985): Der Dativ im heutigen Deutsch. Studien zur deutschen Grammatik 28. Tübingen.

Wilmanns, Wilhelm (1909): Deutsche Grammatik. 3. Abteilung, 2. Hälfte. Straßburg.

Zifonun, Gisela (1997): Grammatik der deutschen Sprache, hrsg. v. Zifonun, G. Berlin.

片岡宜行 (1998):「ドイツ語の与格の分類について」 京都大学大学院独文研究室「研究報告」第 11 号 S.25-39.

使用したコーパス

Mannheimer Korpus I

LBC Böll, Heinrich: Ansichten eines Clowns. Köln, Berlin: Kiepenheuer & Witsch 1963.

LGB Grass, Günter: Die Blechtrommel. Frankfurt/M.: Fischer 1964.

LJA Johnson, Uwe: Das dritte Buch über Achim. Frankfurt/M.: Suhrkamp 1962.

本論文で使用した例文はほとんどLBCから取ったが、一部LGBとLJAからも補った。なお、Mannheimer Korpus は、大阪市立大学にて神竹道士氏の仲介のもとで利用させていただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げたい。

Dativ und Raumergänzung

KATAOKA Yoshiyuki

Im allgemeinen teilt man den deutschen Dativ in mehrere Gruppen — Dativobjekt, Pertinenzdativ, Dativus commodi / incommodi, Dativus ethicus und Dativus iudicantis.

Aber eigentlich überschreitet der Dativ oft die Grenzen zwischen den einzelnen Gruppen. Das Dativobjekt und der Pertinenzdativ können den Nutznießer (a) oder den Geschädigten (b) zeigen, wie Dativus commodi / incommodi.

(a) Der Junge schenkt *seiner Mutter* Blumen.

(b) Er schlägt *ihm* ins Gesicht.

Und das Dativobjekt kann den Besitzer von Körperteilen zeigen, wie der Pertinenzdativ.

(c) Man gab *der Dame* den Spiegel <u>in die Hand</u>.

(d) (...) — aber ich schaufelte weiter, bis Marie *mir* die Schüppe <u>aus der Hand</u> nahm.

Also kann man annehmen, daß der Dativ eine allgemeinere semantische Funktion hat. Im vorliegenden Aufsatz behandele ich die Beziehung zwischen Dativ und Raumergänzung, um diese semantische Funktion zu erklären.

Wenn es eine Pertinenzrelation in einem Satz mit Raumergänzung gibt, liegt die Pertinenzrelation immer zwischen Dativ und Raumergänzung. Dabei zeigen die beiden zusammen die Richtung (e), die Herkunft (f) oder den Ort (g) von dem jeweiligen Vorgang oder Zustand.

(e) Er blickte *mir* <u>in die Augen</u>, (...)

(f) Einmal fiel *ihr* mitten in einem Tennismatch der Schläger <u>aus der Hand</u>, (...)

(g) Obwohl die Bohnen, die ich gegessen hatte, *mir* noch schwer im Magen lagen und meine Melancholie steigerten, (...)

In diesen Sätzen haben die Dative und die Raumergänzungen einander ergänzende Funktionen. Die Dative zeigen die Personen, die am Vorgang beteiligt sind. Dagegen zeigen die Raumergänzungen konkret die Richtung, die Herkunft oder den Ort.

Aber diese Beziehung zwischen Dativ und Raumergänzung läßt sich nicht immer finden, wenn es die Pertinenzrelation zwischen ihnen nicht gibt.

(h) Die Kinder nahmen Bonbons, Griffel, Radiergummi aus den Regalen und legten *dem alten Derkum* das Geld auf die Theke.

(i) Er würde sagen, er wäre ausgerutscht, die Mappe wäre *ihm* in eine Pfütze gefallen, (...)

In (h) zeigen der Dativ und die Raumergänzung zusammen die Richtung von einer Handlung. Hier kann man die einander ergänzende Beziehung zwischen Dativ und Raumergänzung feststellen. Aber in (i) nicht, denn in diesem Satz zeigen sie nicht zusammen eine Richtung.